

あだとさくら (下)

II 「さくら」について

あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

伊勢物語に出てくる歌であるが、桜花が「あだ」なるものとみなされている。何故であろうか。

あだとは、律令国家成立以前には、倭朝^{II}本来のもの、とは異なる他種族を意味し、他種は又、倭朝にとって、敵対し征服されるべきものであったから、敵^{II}仇の意味にも重なり得た。そして倭朝がそれらの他種を併吞してゆく過程においては、臣従した他種や、倭朝内の反逆者も亦あだと呼ばれた。さらに古代国家が、律令体制のもとに基礎をかためるにつれて、あだは、律令体制から閉め出された散所民、帖外の民を意味するようになった。あだと帖外の民との関係は、このようにして成立したのであるが、さく^{註1}らも亦、あだと同様の経路をたどって帖外の民にかわるものであった。桜花があだであるのは、古代国家における帖外の民を介しての事である。

律令国家が古代統一国家として、普遍的な宗教を支えとするのに対し、それ以前の氏族社会は、種別的な呪術によって支配されてい

あだとさくら (下)

中井和子

た。その呪術は、氏族生活の根幹をなす農耕に関して、もっとも支配的であった。農耕に関する呪術は、「田遊び」と称され、それは、田の精霊に対する感染呪術を中心とするものであった。その田の精霊が特定の形をとって姿を現わしたものがはなとみなされ、さくらは、はなの代表としての意味を負っていたのである。

氏族社会の時代が終りかけ、やがて倭朝が、他種^{II}あだを統合しはじめると、はなの意味に変化が生れる。即ち倭朝からすれば、他の氏族社会のはな、^{II}田の精霊^Vは、他種^{II}あだの精霊^{II}はなになった。換言すれば、倭朝にとってやがて支配されるべき他種のはなは、あだのはな、即ち文字通りのあだばなであった。そしてさらに、あだなる他種が現実には倭朝に臣従する時には、当該氏族社会は自らをはな^{II}精霊^Vとなして、倭朝に臣従する事になった。即ち倭朝に対して自らを精霊^{II}はなとなして服従を誓う事が、この氏族社会の倭朝に対する臣従のしるしとみなされたのである。此処で初めてあだは、臣従しなかつた他種を意味し、同時に、はなは精霊として倭朝に対して降伏のタマフリをなすものとなり、あだ^{II}はな^{II}さくら、という等式が成立したのである。

やがてさらに大和朝が律令体制のもとに基礎をかためるにつれて、統

一的な古代国家が成立する事になった。古代国家は普遍主義に則る宗教を必要とするものであったから、氏族社会の種的個別主義の支柱たる呪術は否定されることになった。そして、呪術の中心であったはな、△田の精霊▽は、①形骸化、形式化されることでわずかに生きのびるか、②古代国家にはいれられないものとして帖外の世界に追放されるか、という事になった。

① 古代国家は、かつての氏族社会の呪術を田植祭に限って、氏族的なものの存続を、それを形骸化する形で許した。又臣従して宮廷行事の中にまぎれこんだはなは、臣従した他種という意味を失って、征服と勝利を意味する目出たいはなへ、そしてやがては只管に目出たいはなへと形式化された。例えば、律令の官人にとってははなをかざすことはかつては臣従者を従える事を意味していたが、やがて形式化された賀寿を意味する事になった。

② 田遊びのはなは、古代国家の成立を介して、田楽のはなになった。同時にはなは、己れを精霊として倭人社会に対して降伏のタマフリを業とする芸能賤民¹¹田楽法師を意味する事にもなった。古代国家は、一方では帖外の民たるあだを生み出し、同じく帖外の民たる芸能賤民というはなを、乃至、呪術兼芸能という形の原始芸能なるはなを生み出したのである。流離する賤民的精霊が、以後はなの本義となるのである。

①がはなにとって初めから固定化を意味したのに対して、②の流離するはなは、再度固定化される迄は、旅から旅への漂泊を経験しなければならなかった。そして固定化されると共に、芸道のはなを咲かせる事になった。観阿弥、世阿弥によって実を結ぶに至った花である。かつて臣

従化の道を通って宮廷に入ったはなが、形式化されて宮廷官人にとって目出たいはなとなったように、観阿弥、世阿弥のはなも亦、幾歳月の流離の果てに、將軍義満によって目出たいはなとして賞翫されるようになった。はなは、即自的な賤しいはなから、義満を介して貴族社会にとって、即ちはな自身からすれば対他的に目出たいはなになったのである。しかし観阿弥、世阿弥の志向したはなは、即自的に賤しく対他的に目出たいはなを、それ自身にとって、即ち対自的に目出たいはなたらしめようとするところにあったといえる。無論それは、芸能の世界にしてわずかに許される試みではあったが。

観阿弥、世阿弥の企ては、己れの神とかつての氏族時代の呪術とを復活させる企てでもあった。その企ては、特定の地域に固定を果した「三河の花祭り」にもみられるところである。但し此処では、はなは、呪術と芸能の混合体として固定化し、芸能のはなの開花、即ち、芸能から芸道への開花はみられないままであった。

以上が、はな、△さくら▽の辿った経路の概略である。以下順を追うて、あとを辿ることにする。

一、大和朝におけるはな、△さくら▽

氏族社会において、呪術△田遊び▽は、氏族の全員参加の下に行われた。ハリソン女史は「古代芸術と祭式」において、ギリシャ悲劇の前身としてのギリシャの祭式をとりあげ、「祭式の生れるのは共同の行為であり、共同の情緒からである」という。ここでは、田の精霊△はな▽に命令する神も、それに随順する精霊も、同じ一つの氏族圏にある。神は^{註2}

氏族の代表である氏の上或は巫女が当り、精霊も亦、氏族の者が当つたのである。氏の上の役目は、氏族の意志を代表して田の精霊 \wedge はな \vee をいかに上手にだましますかしてその生殖をそそり立てるかにあり、一方精霊 \wedge はな \vee は、数々のそそり立てに對してだだをこね、あらがい、最後に神に對して随順の意を示し、秋の豊作を約束するのである。

ところが、大和朝が他の氏族社会を征服するに従い、田遊びは、倭朝に臣従を誓う諸氏族の降伏のタマフリに変化したのである。そこでは、降伏した諸氏族が精霊の位置を占め、倭朝の大王が神となり、精霊から大王への国フリと呼ばれるタマフリが行われるようになった。その典型的な例は「溺れし時の種々の態^{註3}」を演ぜせしめられた隼人の場合であるが、はなも亦、精霊として大王に降伏のタマフリを誓う、臣従するはなに変化したのである。その例を、臣従したあだ \wedge 他種 \vee の第一号である阿多^{註1}の隼人の祖火闌降命の母、神吾田鹿葦津姫と、さくら \wedge はな \vee の關係に見出すことが出来る。

吾田の笠沙の御崎で神吾田津姫をみた天孫瓊々杵尊は、やがて彼女と契りを結ぶのであるが、神吾田津姫は、「亦の名は木花開耶姫」といふ、さくらを名に負う姫^{註5}であった。瓊々杵尊と神吾田津姫の結婚の意味は、阿多の隼人が服従のしるしとして、阿多(吾田)の国の姫神吾田津姫を貢物として差し出したという事であるが、その神吾田津姫の亦の名が、木花開耶姫であった事は、その国の田の精霊であるさくらも亦、服従のしるしとして、天孫に捧げまつられたことを意味すると思われる。今までは、吾田の地に秋のみりを約束していた田の精霊 \wedge 木の花 \vee が、今は天孫の為に木の花を開かせて天孫に臣従することを誓ったのである。し

あだとさくら(下)

かも、臣従したあだ \wedge 他種 \vee の第一号であった隼人の臣従が、はなの中の特にさくら^{註6}の臣従という形で行われたことは、以後、臣従するはなは、さくらに象徴されるきっかけをつくるものであった。神吾田津姫の結婚にまつわる次の話は、意味深長である。

天孫瓊々杵尊の求婚に對し、父大山祇神は妹木花開耶姫ともども姉の磐長姫も奉ろうとしたのであるが、

是に大山祇神、乃ち二の女をして、百机飲食を持たしめて奉進る。時に皇孫、姉は醜しと謂して、御さずして罷けたまふ。妹は有国色として、引して幸しつ。則ち、一夜に有身みぬ。故、磐長姫、大きに慙ちて詛ひて曰はく、「假使天孫、妾を斥けたまはずして御さましかば、生めらむ兒は寿永くして、磐石の有如に常在らまし。今既に然らずして、唯弟をのみ独見御せり。故、其の生めらむ兒は、必ず木の花の如に、移落ちなむ。

(一)に云はく、磐長姫恥ぢ恨みて、唾き泣ちて曰はく『顕見蒼生は、木の花の如に、俄に遷転ひて衰去へなむ』といふ。此世人の短折き縁なりといふ)

右の話は、天孫瓊々杵尊に臣従しようとした精霊は、木花開耶姫だけではなくて、磐長姫もそうであった事を伝えるものである。にもかかわらず、「有国色」たる木花開耶姫だけが臣従を受納されて結婚を許され、「醜い」磐長姫は捨てられたのである。これは、倭朝に嘉された美しいさくらだけが臣従することを許され、倭朝にとって曲々しいと考えられた醜いもの \wedge 磐長姫 \vee は、臣従を許されなかったという事である。そして、一見類似とみえる次の二つの物語も亦、その事を暗示すると思われる。

① 履中紀 三年冬十一月の条

天皇兩枝舟を磐余市磯池に泛べて皇妃と各分れ乗りて遊宴びたまふ。膳臣余磯酒を献る。時に桜花御盞に落れり。天皇異みたまひて、則ち物部長真胆連を召して、勅して曰はく、「是の花非時にして来れり、其れ何処の花ならむ。汝、自ら求むべし」とのたまふ。是に、長真胆連、独花を尋ねて、掖上室山に獲て、献る。天皇、其の希有しきことを歎びて、即ち宮の名としたまふ。故、磐余稚桜宮と謂す。其此の縁なり。是の日に、長真胆連の本姓を改めて、稚桜部造と曰ふ。又、膳臣余磯を号けて、稚桜部臣と曰ふ。

② 古事記 雄略天皇の条

天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂為したまひし時、伊勢国の三重姝、大御盞を指挙げて献りき。爾に其の百枝槻の葉、落ちて大御盞に浮かびき……。天皇其の盞に浮かべる葉を看行はして、其の姝を打ち伏せ刀を其の頸に刺し充て、斬らむとしたまひし時、其の姝、天皇に白して曰ひけらく「吾が身を莫殺したまひそ、白すべきこと有り」といひて、即ち歌ひけらく

右の二つの記述は、天皇に献る盞の中に、桜のはなびら、或は槻の葉がおちたという、何れも盞に何ものかが落ちた点で類似している。にもかかわらず、履中紀では吉兆として天皇の歎びとなり、雄略帝の場合には殺されようとする程の凶兆となつて、両者は甚だしく異なるのである。履中紀では、落ちたものが桜花であつたので、木花開耶姫同様、他種のあだ花の倭朝に対する臣従という吉兆を意味し、それにひきかえ、雄略帝の場合は槻の葉であつたので、磐長姫がそうであつたように、他種

のあだ花（はなでなく葉であつた事が特に失礼であつたのであろう）の倭朝に対するまがくしい凶兆を意味したと思われる。

履中紀において、桜花の出所を求められた物部長真胆連は、「掖上室山に獲て献る」とある。掖上の名は、神武紀、孝昭紀、孝安紀、推古紀と頻出し、それは南葛城郡掖上村の地といわれている。葛城の地は、雄略帝の時眉輪王の乱に關係して滅びる迄大和朝の外戚として重要な地位にあつた、葛城氏の地である。とすれば、履中紀にみえる掖上室山より来つた桜花とは、葛城氏という重要な氏族^{註6}のものであらう。そして、この事にあつた物部長真胆連と膳臣余磯は、ともにこの日、本姓を改めて稚桜部造、稚桜部臣となつた。これは、新しく臣従した稚桜（他種）が我が部民となつたことのしるしである。宮居に名づけられた稚桜宮も、稚桜（他種）が臣従した事を記念して名づけられたのである。その他、大和周辺には、宮居にかぎらず井にも桜の名を負う桜井^{註7}の名称が多いが、これも亦、他種であるあだ花の臣従を記念しての名であつたらう。

履中紀の桜花の到来が目出たい背景を負うていたのにひきかえ、雄略帝の盞に槻の葉の到来をもたらしたのは、伊勢国の三重姝であつた。当時伊勢国は、大和朝にとっては不穩なるあだ花（他種）であつた。^{註8}三重姝は、雄略に服従を誓う伊勢の国の貢物として差出されているのであるが、盞の中に落ちたものが、桜花でなくて槻の葉であつた事は、ただでさえ疑われている三重姝の立場を余計危くさせたのだと思われる。槻の葉が何を意味するかはよくわからないが、或はそれは臣従どころか反逆

を意味するものであったのかも知れない。しかし三重姝はけなげにも、歌を唱った。槻の葉の到来がけっして凶兆ではなくて、むしろ伊勢国の雄略帝に対する随順のしるしであり、目出たい吉兆であることを力説し、遂に雄略帝の怒りを解いたのである。

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮……百足る 槻の枝は 上枝
は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり 下枝は 鄙を覆へり 上枝
の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち触らばへ 中つ枝の 枝の末葉は
下つ枝に 落ち触らばへ 下つ枝の 枝の下葉は あり衣の 三重の
子が 指拵せる 瑞玉盞に 浮きし脂 落ちなづさひ 水ををろこを
ろに 是しも あやかに恐し 高光る 日の御子 事の 語言も 是
をば^{註9}

以上二つの例は、倭朝にとって他種であったあだ花が、やがて倭朝に征服されて後、ある者は、嘉せられて自らを精霊 \parallel は Δ となして臣従して宮廷入りし、ある者は、まがましいはな \parallel 精霊として排除され遂には帖外の世界に追放される、はな Δ 精霊 \vee の辿るべき二つの方向を暗示すると思われる。しかし、倭朝に嘉せられて臣従したはな Δ さくら \vee と雖も、その後の運命が決して安穩なものでなかったのは、臣従して律令の末端に加えられた隼人の、その後の運命をみてもわかることである。さくらも亦、倭朝の官人に嘉せられたとはいえ、さくら Δ という形式化されたしるしだけが宮廷官人にもてはやされたにすぎず具体的なさくら Δ た Δ ち Δ はな \parallel 精霊 \vee は、律令体制のもと強力な中央集権がすすむにつれて、さきに追放されたはな \parallel 精霊同様、改めて疎外の憂目に会う者も亦多かったのである。

あだとさくら(下)

二、律令期以後のはな

1 形骸化、形式化の方向

① 田植祭

古代国家は、氏族社会の種的個別主義の支柱である呪術 Δ 田遊び \vee の否定の上に成立したので、田遊びの重要な要味である田の精霊 Δ はな \vee も亦、否定されるべき運命を辿った。しかし、田植祭にかぎっては、氏族的なものを残しつつ、それを形骸化する形で、存続を許したのである。各地の神社の神事芸能として残る御田植祭には、形骸化されたものであるとはいえ、氏族社会の田遊びにもっとも近い形を見出すことが出来ると思われる。古代国家と雖も、農耕を主なる生産手段にしていたので、秋のみのりの始めである田植えに関しては、それを全からしめる為の祭式を必要としたのであろう。名高いものとして、伊雑宮、住吉大社、香取神宮、阿蘇神社の御田植祭^{註10}りをあげることが出来る。

その一つ、伊勢伊雑宮は、伊勢国磯部町にあって、皇太神宮の別宮或は遙宮と称されてきたが、伊勢出自の海部の民たちの拠り所としていた神は、この宮の神である。又、天語歌の担い手である天語部や天駟丁使もここを出自とした。ここに田遊びの古い姿を伝える御田植神事の残存するものもあることであろう。その他、住吉、香取、阿蘇も亦、古代国家成立以前には、強大な氏族を擁した氏族神であって、律令体制がかたまるにつれて多くの帖外の民を排出した地である。

伊勢伊雑宮の御田植祭りは、太鼓(田鼓)一、佐々良二、笛二、太鼓

二、小鼓一、謡六、のはやし方と、早乙女六、田道人八の仕手方とで行われる。早乙女は十四、五才の少女、田道人は三十才迄の独身の男子が当るとあるが、これは、今年田植をつとめる成人式前の男女が山に入つて精進潔斎し、神の資格を得ることになっている。早乙女、田道人は互い違いに並び、はやし方の囃しをうけて後苗代を廻る、という事である。恐らく田道人は田遊びにおける神[△]氏の上[▽]の役、早乙女は精霊[△]はな[▽]の役に当り、田道人のさまざまのたましすかしに対し、早乙女はだだをこね、あらがい、最後に随順するのであろう。しかもこの男女の対立は、男女かけあいの歌垣を暗示し、これは又、「いろいろごろみいへ」を介して男女の贈答歌という形で宮廷貴族の間にも入りこんだのである。

香取神宮の御田植祭りでは、早乙女は帽冠という花葉をつけるので、彼女らが田の精霊[△]はな[▽]であることはなお明らかと思われる。伊勢伊雜宮の早乙女は、白鉢巻に一文字笠、白衣の平袖、黒朱子丸帯を縦結びにし、赤しごきを左方で結ぶ真紅色の襷をし、前帯につぼめ笠をさす、とあるが、これも早乙女をはな[△]精霊[▽]と考えての紛装であらう。

② さくらの宮廷化

吾田の地における木花開耶姫の随順、履中紀の桜花の到来等は、何れも他種なるあだ花、[△]田の精霊[▽]が、秋のみりを約束するさくらを捧げて、倭朝に服従を誓うものであった。かかるあだ花[△]さくら[▽]の服従をうけた倭朝は、稚桜宮、桜宮、桜井の名を冠してさくらの臣従を記念したのであった。しかも、木花開耶姫といい、稚桜宮の由来記といい、はな[△]精霊[▽]の中でも特にさくらの随順という形で物語に記されている

のは、さくらが臣従するはな[△]の代表とみなされた為であらう。以後さくらは臣従のシンボルとして、宮廷行事の中に定着する形跡は強い。

例えば、天の石戸前で行われた祭式には、鹿と並んでさくら（波々迦）^{註11}が用いられている。天の石戸前の祭式は、天鈿女命の「胸乳を掛き出で裳緒を番登に忍し垂れて」^{註12}舞うた歌舞が中心をなしているが、これは臣従して代々「緩女君氏、供神楽之事」^{註13}とある、猿女君の降伏のタマフリ^{註14}の様を伝えたものと思われる。その降伏のタマフリの儀式に、さくら（波々迦）と鹿が登場しているのである。

……天兒屋命、布刀玉命を召して、天の香山の真男鹿の肩を内抜きに抜き、天の香山の天の波々迦を取りて、占合ひ麻迦那波しめて……

（古事記、日本古典文学大系八一頁）

「波々迦」は秋のみりを約束するはな[△]田の精霊[▽]の代表として、鹿も亦秋のみりに深い関係をもつ土地の精霊^{註15}の代表として、いわば精霊の代表がここに登場したのではなからうか。それは倭朝が、さくら（波々迦）・鹿という精霊の代表を臣従せしめていることを、宮廷行事の中で示したものである。

その後、さくらは、「処女らがかざしのために、遊士が鬘のためにと敷きませる国のはたてに咲きにける桜の花の匂ひはもあなに」^{（万葉集巻八、二四二九）}と詠まれ、さらに、「百敷の大宮人はいとまあれや桜かざして今日もくらしつ」^{註16}とあって、次第に宮廷男女のかざしや鬘に用いられるようになった。しかし彼等が桜をかざしたのは、桜が美しかった為ばかりではない。そこには、桜花の到来をあだ花[△]他種[▽]の臣従を示す吉兆として歛んだ履中紀の記述と同じ心が働いていたと思われる。桜をかざ

すことは、臣従した他種のあだ花を従えていることのしるしであったのである。御所紫宸殿の左近の桜は、仁明朝に梅から桜に易えられたとの記事がみえるが、この紫宸殿の前におかれた桜も亦、臣従のしるしとしての意味をになっていたのであろう。

又、万葉集に二人の壮士に詠られた桜児という娘子の話がみえるが、その時「懸し樹経死」した桜児を歌った壮士の歌として

君去らばかざしにせむとあがおもひし桜花は散りゆけるかも

(万葉集卷一六、三七八六)

の、桜花△桜児▽を「かざしにせむ」といういい方には、臣従のしるしとしての桜の性格が働いていると思われる。「桜児をかざしにせむ」とは、男が女を臣従せしめる↓妻にする、の意である。源氏物語でも、匂宮は宇治の中君に、「山桜匂ふあたりに尋ねきて同じかざしを折りてけるかな」(日本古典文学大系源氏物語権本三四三頁)と歌いかけて、中君△山桜▽を、かざしにする⇨臣従せしめる↓妻にする事を暗示したのであった。

かようにさくらにはあだ花△田の精霊▽の臣従のしるしとして宮廷に入り、さらに貴族の日常生活の中にさえ定着して行ったが、もうその時には、具体的なな△精霊▽の臣従は終っていたのである。古代国家が律令体制のもとに基礎をかためるに従って、具体的なな△の臣従はも早意味を失なって、征服と勝利を意味する目出たいさくらというしるしだけが形式化されて残り、貴族の生活を彩ったのである。そして遂には、貴族たち自身も、桜が臣従のしるしであった事を忘れ果てて、桜は自分たち自身のしるしであるように錯覚するようになる。桜が日本の象徴と

あだとさくら(下)

なる経緯には、右のような事情があったと思われる。そして、具体的な生きたは△精霊▽は、次に示すような、律令体制外の帖外の民として、賤民的な精霊の道を辿るのである。

2、賤民的な△精霊▽

① 田楽におけるは△

古代国家の成立によって、氏族社会を支えていた呪術△田遊び▽の重要な要素であったは△田の精霊▽は、否定されるべき運命を辿った。

その中には、さきにのべたように、臣従して宮廷入りするものや、その存続の許された田植祭りのような方向もあったが、田植祭りは形骸化されてリチュアルなものになり果て、臣従の道も亦その行末は形骸化どころか具体的なな△は捨象されて、さくらというしるしだけの残る形式化の方向であった。従って、氏族社会における田遊びの△の大部分は、古代国家の外に追放されて、田楽の△は、或は、己れを追放した倭人社会に対して降伏のタマフリを業とする芸能賤民⇨田楽法師に転化するのである。

京都紫野に「夜須礼」祭と称する鎮花祭が残っている。この鎮花祭に關しては、神祇令に

季春鎮花祭

謂△天神狹井二神△也。在△春花飛散之時△、疫神分散而行瘡、為△其鎮場△、必有△此祭△。故曰△鎮花△也。

とあるが、「在春花飛散之時、疫神分散而行瘡」という考えは、はなを疫神としているのであって、既には△精霊▽は、賤民的な△に転化せしめられているのである。律令体制の確立によって体制から追われた

はな、 \wedge 精霊 \vee は、体制の外を歩く田楽のはな、即ち己れ自身を精霊として体制にむかつて降伏のタマフリを業とする芸能賤民を意味する事となつたが、それらのはな、 \wedge 精霊 \vee は、体制の側からいえば、いつあだ \wedge 敵 \vee なるものに転ずるかもわからぬ不気味なあだ \wedge 精霊 \vee 、疫神であつた。そこで、それらのあだ \wedge 精霊 \parallel はな \vee の飛散する春の季節は「疫神分散而行癘」と考えられたのである。従つて鎮花祭は、体制からいえばはな、 \wedge 精霊 \vee の魂を鎮めて「分散而行癘」するのを未然に防ぐことであり、はな、 \wedge 精霊 \vee 自身からは、体制にむかつて降伏のタマフリを行なうと同時に、己れ自身の魂を鎮めて己れ自身の祭りを行なう事であつた。京都紫野で行われた「夜須礼」祭は、大和で行われたこの鎮花祭が、平安奠都にもなつて奠都したものであつたと思われる。

奠都以前の山城の地は、東の愛宕には八坂を中心に高麗系のあだ \wedge 他種 \vee が住んでおり、西の葛野には、秦氏、又賀茂の地には雄略朝に倭朝に滅された葛城氏の移住があつたと伝えられる。ところが平安奠都による王城の地の設定は、それらのあだ \wedge 他種 \vee のうち、朝廷にあだ \wedge 敵 \vee なす者を帖外の地に排除せしめることになつた。奈良朝から平安朝へのうつり行きには、崇道天皇（早良親王）をはじめ多くの人々に非業の死を遂げさせしめたので、彼等の怨霊を鎮めるための御霊会が神泉苑で催されている。しかしこの御霊会の内実は、奠都に伴なつて帖外の地に追放された、はな、 \wedge 精霊 \parallel 芸能賤民 \vee の御霊会であつたと思われる。

三代実録貞観五年五月廿日の条に、当時の御霊会が既に歌舞狂奔群衆喧騒の場であつて、「遐邇因循漸風俗を為す」と記されているのは、御霊会が、はな、 \wedge 魂をして降伏のタマフリを行わしめると同時に、はな、 \wedge 魂を

鎮めるはな自身の祭り、鎮花祭であり、後の「夜須礼」祭につながる事を物語るものである。そしてこの御霊会は、正暦五年の「天下疫死者尤盛、起 \wedge 自 \wedge 鎮西 \wedge 及 \wedge 京師 \wedge （百練抄）」という状況を背景にして、長和四年五月廿日「京人花園辺建立 \wedge 神殿 \wedge 祠 \wedge 疫神 \wedge 、依 \wedge 疫神託宣 \wedge 也。今年疫病競起^{註18}」（百練抄）」と、疫神社の建立をみるに至つた。「依疫神託宣也」とあるので、はな、 \wedge 精霊 \parallel 芸能賤民 \vee に対する恐れが、朝廷をして遂に彼等ははな、 \wedge 神 \wedge 疫神 \vee を祀らしめる事になつたのであろう。しかし、疫神がはな、 \wedge 精霊 \vee の神であると同時に朝廷の神でもあるという二面性をもつことは、八坂感神院に祀られた素戔鳴尊が、精霊の神としての一つの間、牛頭天王 \parallel 疫神をもっているのと同じである。疫神の建立は、朝廷に対する降伏のタマフリを意味すると同時に、はな、 \wedge 精霊 \parallel 芸能賤民 \vee の神を祀つて、彼等ははな、 \wedge 魂を鎮める事でもあつたのである。

鎮花祭は、平安末の天下騒乱の時代になると、その状況に歩調をあわせるように、降伏のタマフリという朝廷側の意図を超えてはな、自身の祭りに比重がかかる事となつた。百練抄久寿元年四月の条に「近日京中児女。備 \wedge 風流 \wedge 。調 \wedge 鼓笛 \wedge 参 \wedge 紫野社 \wedge 。世号 \wedge 之夜須礼 \wedge 。有 \wedge 勅禁止 \wedge 。」とあり、梁塵秘抄口伝集十四には

ちかきころ久寿元年三月のころ、京ちかき男女紫野えふうりやうのあそびをして、傘のうへに風流の花をさし上、わらはのやうに童子にはんじりきせて、むねにかっこをつけ、数十人斗拍子にあわせて乱舞のまねをし、悪気と号して鬼のかたちにて首にあかきあかたれをつけ、魚口の貴徳の面をかけて十二月のおにあらひとも申べきいで立にておめきさけびくるい、神社にけいして神前をまはる事数におよぶ

とある。この時はじめて「夜須礼」の語が出るが、これは祭りの唱えごと「やすらえ花よ」^{註19}に由来している。はな、^{註19}精霊^{註20}自身^{註20}が自らの魂を鎮めるための暗示をかけて、降伏のタマフリを誓うものである。にもかかわらず、自らのしるしである花傘^{註20}のもと、疫神をあらわす悪気（鬼）の紛装をして踊り狂い、一般の人々までまきこんでいったのである。はな、^{註20}精霊^{註20}の魂は静まらず暴発現象をおこしたのである。いってみればそれは、はな、^{註20}精霊^{註20}芸能賤民^{註20}の体制逆の示威運動であった。夜須礼祭の唱えごとや節廻しは、念仏踊りの系統をひくといわれている。とすれば、「夜須礼」祭の狂騒乱舞の中心は、日頃は帖外の地で悪疫退散のお祓をして歩く芸能賤民、^{註20}陰陽師、^{註20}唱門師、^{註20}田楽法師^{註20}の徒であったろう。

謡曲「泰山府君」の中に、泰山府君に願をかけて桜の命乞いをする桜町中納言の話がみえ、同様の話は源平盛衰記にもみえる。吉野の桜を移し植え、その中に家を建てて住んだので、世の人が桜町といったが、その中の殊に愛した桜が七日で散ることを惜しんで泰山府君を祭り、天照大神に祈ったため、花寿三七日を保ったという話である。泰山府君は、唐から叡山の麓に将来した赤山明神といわれるが、平安朝に既に延命長寿の神としてあらわれ、後には商売繁昌の神となっている。^{註21}しかし若狭郡縣志にも「陰陽師の徒を定めらるゝ時、…専ら泰山府君を崇み祈禱を事とす」とあって、陰陽師の徒によって担われた彼等、はな、^{註21}精霊^{註21}の神であった。延命長寿から商売繁昌に変わったのは、陰陽師の徒のお祓の内容が時代に順応した為で、この神の民間流布も亦、陰陽師の徒の働きによるものであろう。

彼等^{註21}はな^{註21}精霊^{註21}は、彼等の神泰山府君を祀ってお祓をして歩き、

あだとさくら（下）

一方彼等自身の物語りを彼等の芸能の中に定着させて行ったのである。桜の命乞いの話も、主人公を桜町中納言^{註22}としているが、実は彼等、はな、^{註22}自身^{註22}の鎮魂の物語りであり、命乞いされたさくら^{註22}は、彼等自身の事であったと思われる。（泰山府君は後に桜の一品種になっている）又、源平盛衰記に「泰山府君を祭り、天照大神に祈った」と、神が二つ出ているのは、彼等自身の鎮魂^{註22}泰山府君を祭る^{註22}が、体制^{註22}天照大神^{註22}に対する降伏のタマフリという形をかりなければならなかった事を物語るものである。陰陽師、唱門師、そしてさらに田楽、猿楽の徒といった芸能賤民は、体制から追放された賤民的なはな、^{註22}精霊^{註22}として、体制にむかつての降伏のタマフリとしての呪術兼芸能を行なって生きつづけたのであるが、その呪術兼芸能の中に、実はひそかに彼等の神を祀り、彼等の鎮魂の物語りを歌い込んだのであった。

② 「花祭り」のはな

天竜川の溪谷に沿う一帯の地、三河国設楽郡に、設楽祭或は花祭りと呼ばれる祭りが伝わっている。この花祭りは、十二月から翌年一月中旬にわたって設楽郡の各地で順次行われ、祭りの行われる期日からいっても田遊びの行われた時節に合致するので、古代国家から追われた芸能賤民の徒が、ここ設楽の地にかくれ里をみつけ、定住して、彼等のもとの氏族社会における田遊びを回復させたのかも考えられたのである。しかしこの祭りを仔細にみると、氏族社会否定という古代国家の政策を歴然と残しており、花祭りも亦、田遊びの再現ではなくて、体制に対する降伏のタマフリとして行われているのである。にもかかわらず、田楽法師に担われて流離の旅をつづけた田楽とは異なり、かくれ里に定住して行わ

れたこの祭りには、氏族社会の田遊びの姿も顕著であって、降伏のタマフリはむしろ表向き事にすぎない。この祭りには、精霊のタマフリとかつての田遊びとが二重に重なっており、従って、呪術が芸能に転ずるうつりゆきをみる事が出来るのである。早川孝太郎氏の著「花祭」によって、特にうつりゆきに注目して花祭りを辿ることにする。

まず第一は花祭りの担い手である。早川孝太郎氏の「花祭」には、「花祭りは一般的には氏神の祭りとなっていて、これにあずかる者は、すべて地内の氏子となっているが、一度祭祀の組織に立入って観察すると、祭祀の形式が歌舞中心になった関係から、氏子があづかる」と、それは一個の概念にすぎぬもので、直接祭祀に当り、これが主体となす者は、あるかぎられた範囲で、延いて一種の祭祀団すなわち神人ともいうべきものが存在したのである」とある。甚だまわりくどい表現であるが、これはこの祭りが表向きは地内の氏子の祭りと呼ばれるが、内実はみやうど衆と称する特殊祭祀団の祭りであるという二重構造をもつ為に外ならない。それは、禰宜（鍵取）、福禰宜（幣取）を統卒者とするみやうど衆という一種の祭祀団、即ち体制から疎外された帖外の民、はな／＼精霊Vの祭りであった。

第二は、みやうど衆の奉ずる神についてである。現在花祭りの神は一定しておらず、それぞれの村によって異なっている。例えば大入系^{註25}三沢では「幣取がまず屋敷裏に祀ってあるいづ（飯綱）の八天狗の祠」とあり、他の箇所では、「鍵取屋敷の裏の八大竜王の社」とあるから、それぞれの村が八天狗、八大竜王、みるめ明神、ひじり様、といったそれぞれを祀っている事がわかる。しかし振草系古戸では明治初年まで、

祭りに先立って村の西北方の白山妙理大権現の奥の「ひじり様」と称する祠に参籠して嚴重な潔斎を行う「高嶺まつり」を行なったとあるもので、これらの神は凡て、この白山妙理大権現^{註24}から枝分れたものであるうと思われる。伝説によると、昔この「ひじり様」が白山権現を背負ってこの地に來臨したといわれ、「ひじり様」は又、八大竜王、みるめ明神と並んで花祭りの三大開祖といわれている。

律令体制から疎外されて帖外の民となり流離の旅をつづけた人々が、彼等の神白山権現を奉じてこの三河国設楽の地に辿りつき、昔ながらの氏族社会を営もうとした。古戸に伝わる伝説は、白山権現を奉じた彼等の祖^{註25}ひじりの物語であるかもしれない。ところがこの設楽の地も中央の政策から逃れ得ず、中央の神が彼等の上に君臨し、その結果が白山権現とは一見たち切れた異形の神、ひじり様、八大竜王、みるめ明神、八天狗等々のそれぞれの神を祀ることになったと思われる。「高嶺まつり」の時白山権現に供えられる供物^{註26}は、花祭りの当日天井裏に祀られた彼等の神、梵天様に供えられるものと同一である。

第三にそれでは表向きの神、中央派遣の神は何か、という事である。これはみるめ明神と対立し花祭りの神と対立する、「切目明神」であろう。この切目明神の勧請は花祭りの指手であるはなたちの「神座わたり」の後に行われるが、他方では禰宜の一人が花宿の天井に上り「天の祭り」といわれる彼等自身の神、梵天様へ実は白山権現Vを祀るのである。早川孝太郎氏は、切目明神を、熊野三社に關係の深い紀伊国日高郡の切目莊ゆかりの神としている。

第四は、祭りの見物衆である。祭りの神が、切目明神と、みるめ明神・

八大竜王その他に分かれるように、見物衆も二手に分かれる。前者に
ずるのが「神座」の客であり、後者に応ずるのが「せいと」の客であ
る。神座の客は一般部落内の婦女子、祭事に直接関係をもたぬ有力者
(旦那衆)と、その他の特別客であり、「せいと」の客は、よそ者で祭
りには何の交渉もたぬただの見物衆とある。しかし、「せいと」の客は
祭りの当日祭りの指手であるはな、にむかつて悪口雑言をあげせかける役
を負うており、それ故「悪態まつり」とも呼ばれるのである。

悪態をつく「せいと」の客の役は、田遊びにおける神の役である。後
に神に対する精霊△はな▽のもどきと随順が降伏のタマフリに転化する
に及んで、神の役は細男△精霊▽から分化した大夫の役になったので、大
夫の役という事も出来よう。精霊の側の大夫が神の役を代って行ない、
精霊にむかつて命令し悪態をついて精霊のもどきと随順を一そう面白か
らしめたのである。これに対し、真実祭りに関係をもたぬ客は「神座」
の客である。神座の客は、精霊△はな▽の降伏のタマフリを受ける者と
して中央から派遣された切目明神と同じ側にあるのである。以上の四点
によって花祭りの輪廓はほぼ明らかになったかと思われるが、今少し祭
りの實際の様に立入ってうかがってみたい。

第1に花祭りの指手は、神ともはなとも称されているという事であ
る。はな祭、はな、はな大夫、はな宿、はな道、はなひらくの類であつ
て、これらの名称は祭りの指手をはな△精霊▽芸能賤民▽と考える処に
由来する。ところが一方、はなは神とも呼ばれている。神部屋、神座、
神迎え、神ひろい、神道である。神と呼ぶ言い方には、氏族社会の呪術
の執行者という考えが生きていると思われる。彼等は、自分たちを田遊

びの執行者、神と考えてこの設楽の地に、彼等の田遊びを再現しようと
したのである。しかし結局は、中央派遣の新しい神に対する降伏のタマ
フリとしてしか彼等の田遊びは再現出来ず、彼等は、神の座から賤民的
な精霊の座、はな、に転落することになった。それが彼等が、神ともはな
とも呼ばれる所以であると思われる。そしてさらに彼等は、彼等ははな
神白山権現を八大竜王、ひじり様、みるめ明神といった異形のものに変
える事によってひそかに祀り、はな、の祭りを行なったのである。

第2に田遊びの祭りの中心であった「神座」の変遷である。

ハリソン女史によれば、ギリシャの祭式において、その中心となるも
のは、五月柱又は刈りとった麦とオルケーストラである。祭りはここを
中心として氏族の全員参加のもとに行われたのである。ところが祭りに
参加しない見物衆の出現は、やがて観客席をつくり、オルケーストラは
いつしか観客席の中に埋没してしまった。そして祭式を行なう神々は舞
台に移動し、見物にむかつて役を演ずる俳優に変化してしまった。この
経過を花祭りにはめてみると、五月柱とオルケーストラの座は、明
らかに神座である。現在でもここに「楽の座」があり、又神座の天井に
は梵天が祀られていて、それがかつての祭りの中心であった痕跡をとど
めている。ところが祭りはここを中心に演ぜられていない。祭りは隣の
「まいと」△舞台▽に移動したのであり、それに伴って神座の神た
ちも俳優たるはな△精霊▽に転化したのである。そして神座に祀られて
いたかつての神は、梵天として天井におしあげられ、「まいと」の中央
にしつらえられた竈の上の「びしゃつけ」から四方にはりめぐらされた
「神道」を通じて、神も亦「まいと」△舞台▽に移動したのである。そ

してこの神[△]実ははな[▽]の「まいと」への移動に伴ない、神座には新しい神、中央派遣の切目明神及び見物衆が君臨したのである。^{註27}「神座」の名称は、氏族社会の呪術の執行者たる神[△]後にはな[▽]精霊[▽]の座であるとともに、はな[▽]に転化した彼等がそれにむかって降伏のタマフリを行なう処の新来の神の座の二重の意味をもっているのである。

又、神部屋（楽屋）から「まいと」[△]舞台[▽]に行くためのはな[▽]道が神座[△]新来の神と見物衆の観覧席^{||}棧敷[▽]の中を通っているのは、今日の歌舞伎のはな[▽]道のしつらえと同様であって、はな[▽]道の由来を^{註28}ここに見る事が出来る。祭りの中心が神座から「まいと」[△]舞台[▽]に移動させられたため、はな[▽]精霊[▽]たちも棧敷^{||}見物席[△]神座[▽]を通して舞台[△]まいと[▽]に移ることになり、歌舞伎の花道はその痕跡を残したものである。そして花道のはな[▽]は、精霊^{||}芸能賤民の意である。

第3に然らば花祭りは、新来の神切目明神に対する降伏のタマフリであろうか。それは、神座からはな[▽]たちが移動させられた新たな祭りの場まいと[△]舞台[▽]が、「神座に面した側を正位とし」^{註29}て、しつらえられていることよって明らかである。舞台の俳優が観客席にむかって降伏するように、はな[▽]たちは神座に君臨する新来の神と見物衆にむかって降伏のタマフリを行わしめられているのである。

しかし一方、花祭りは古い時代の呪術の姿もとどめている。それは、まいと[▽]に据えられた竈の上の湯蓋を中心に祭りが行われている、という事である。湯蓋の横には「びしゃつけ」があり、この「びしゃつけ」に神道を通じて神座の天井におし上げられた彼等の神[△]梵天^{||}白山権現[▽]は降臨しているので、彼等は神座に君臨した新来の神に降伏のタマフリ

を行なうとみせ乍ら、実は彼等の神を中心に祭りを行なっているのである。

古代国家成立後、数々の流離の末人々はここ設楽の地に安住の地を見出し、氏族時代の呪術を復活しようとしたのであろう。ところが中央の力はここにも及び、彼等は中央の神に対する降伏のタマフリをしなければならなかった。しかし湯蓋を中心に彼等の祭りが生きる事が出来たのは、さすがこの山間の地には中央の力は強くは及ばなかったからである。従って彼等は、表向きは中央の神に降伏のタマフリを行なうとみせて内実は彼等の神を祀ったのである。

③ 能楽のはな

能楽は、古代国家成立後律令体制から追われて呪術兼芸能を、体制に対する降伏のタマフリとして門付けして歩いた賤民のはな[▽]芸能[▽]民[▽]が、長い流離の旅を通じて彼等の芸能を純化せしめてつくり上げたものに外ならない。その中間には、設楽の花祭の徒のようにかくれ里に定住する者もあつたろうし、又いつまでも門^{はが}ばめの乞食^{はが}をして歩く者もあつたろう。しかし中世になると彼等のうち一部の者は、社寺の庇護をうけて座を形成し、一定の居住地を獲得することになった。そしてその中の一つであった大和結崎に座を結んだ大和猿樂結崎座は、観阿弥、世阿弥父子の代に將軍義満に見出され、その地位を飛躍的に高める事になり、ここに能楽は成立したのである。

かかる上昇を遂げた彼等もはな[▽]なる精霊であることは、花祭りの徒や唱門師、田楽法師と同じであった。むしろ彼等は、自らを帖内の人は別の卑しいはな[▽]と観じ、その即自的に卑しいはな[▽]を見物衆にとって、

即ち、自身からすれば対的に目出たい花に磨き上げる事によって、將軍義満の目にとまったのだと思われる。それは、かつて臣従したさくらが、貴族たちにとって目出たいはなとなり得たのと共通する道である。しかし、自らの伝書を「花伝書」と称し、又「至花道」「花鏡」と称して、自らを卑しいはなと観ずる覚悟に生きた観阿弥、世阿弥の目指したものは、ただに己れ自身を見物衆にとって対的に目出たいはなにするにとどまらなかったと思われる。それは、はな自身にとって対的に目出たい花たる事であり、その時々美しくてうつろい易い時分の花をこえてまことの花に自らを化すことであつた。それは又、己れの神とかつての氏族時代の呪術とを復活させる企てでもあつた。能楽はかかる志向のもとに花ひらいたのである。

三、あだとさくら

本居宣長は、「敷島の大和心を人とはぐ朝日に匂ふ山桜花」と詠んだ。そして、さくらといえば富士山と並んで我国を象徴するものと考えられている。しかし一方、さくらは、にせものという悪い意味をもっている。見物人に交り客とみせて売手に呼応して商売する所謂さくらは、客ならざる偽の客であり、さくらと称される馬肉は本当の肉ならざる偽の肉である。かようにさくらは、一方に目出たい意味をもち、他方に卑しい意味をもっている。

卑しい意味のさくらは、古代国家から追放された卑しい帖外の民の謂である。彼等は呪術兼芸能の担い手として、花祭り、鎮花祭、田楽、延年、猿楽そして能楽にそれぞれの花を開かせたが、所詮彼等は倭人社会

にとって卑しむべきはな、精霊にすぎず、その極端な意味がにせものさくらに固定したのである。しかしもう一方の目出たい意味のさくらも亦、卑しいさくらと決して無関係ではない。それは卑しいさくらをかざす事が貴族たちにとって臣従者を従えるしるしとなり、はな自身からすれば対的に目出たい花となるという、そこから来た目出たさにすぎない。ところが貴族たちはいつしか桜のもつ臣従の標という元の意味を忘れ去り、次第に桜を自分たち自身の標と錯覚するようになった。そしてさらに、さくらは日本人の象徴「敷島の大和心」のしるしともなったのである。しかしさくらが、宮廷においてかかる意味を獲得する過程に呼応するように、さくらには今一つ和歌の担い手たちによる宮廷化のルートがあつた。

律令体制の確立によって和歌は次第に宮廷から姿を消して行く事になつたが、この宮廷から姿を消した和歌を担いつづけたのがあだなる精霊△遊行女婦△たちであつた。彼女らは精霊△はな△の中でもっとも美しいさくらに自らを擬した。伊勢物語の歌「あだなりと名にこそ立てれ桜花」は、自らをさくらに擬した遊行女婦の歌である。そしてさくら△遊行女婦△の屯する「いろごのみいへ」で行われた男女贈答の風習は、やがて宮廷貴族を介して宮廷に持ち帰られ後宮サロンを彩どる事になったのである。しかしそこではあだなる言葉自身が宮廷風にパロディ化されたと同様、さくらも亦宮廷風に変質せしめられた。即ち、男女の恋における当の相手とは別の浮気の相手としてあだが変質した如く、さくらも同様の意味に変質したのである。

かように和歌を介して宮廷に入ったさくらと、さきに臣従をあらわす

目出たい花として宮廷貴族にもてはやされるようになったさくらとは、お互に相扶けて宮廷貴族の間に一つの趣味をつくり出して行ったと思われる。奈良朝においては山に入らねばみられなかった桜註31を、人々は好んで庭木に移し植え、仁明朝には紫宸殿の左近の樹にまで梅と桜を取り換える事になった。宮廷の御宴に花〱桜〱の宴は欠かせぬものとなり、人々は狩かり猟ならざる桜狩を行なった。その他桜は貴族の調度品、屏風絵の図柄となり、桜襲の着物となった。一方和歌においては、和歌の宮廷復帰を記念する古今集の春の部には梅を凌駕してさくらの歌が夥しく並び、これは以後の勅撰集に撰集の態度として固定するに至った。又男女の贈答において、恋する女は自らを桜にたとえ、男はその桜をかざすことを求愛の言葉としたのである。

かように桜は宮廷貴族の愛翫物としてその生活にとけ込んで行ったのであるが、それに呼応して、桜がその背後にひそませていた臣従したあだ〱精霊〱及びそれを持ち歩いた遊行女婦〱精霊〱の姿は次第に影をひそめ、反対に貴族にとって目出たい花から日本の目出たい花へと錯覚の道をすすんだのである。一方宮廷に入る事を許されず律令体制の外を流離することになったさくら〱精霊〱は、卑しいにせものとして転落の運命を辿った。にもかかわらずそれは、転落の運命であると同時に「まことの花」を開く道でもあった。宮廷貴族にもてはやされた桜の道が錯覚の上に成立つのにひきかえ、転落の果てに花開いたさくら〱能のはな〱は、まことの花を求めて自らを永遠化したのである。

注1 「あだとさくら」(上) 府立大学学術報告人文19号

注2 折口民俗学ではこの神を「マレ人」と称し、折口民俗学の中心思想をなしている。但しそこでは古代国家成立後体制から疎外されて呪術兼芸能をして歩く精霊集団も亦「マレ人」として両者が一つづきのものと考えられているので、命令する神が卑しい精霊に転化する過程がとけず、池田弥三郎氏のいう「芸能史のもつれ」(『江戸時代の芸能』77頁)のそも〱の由来になっている。

注3 古事記上(日本古典文学大系113頁)

注4 日本書紀神代下。古事記上。

注5 伊勢皇太神宮の荒御魂を祀るとされる伊勢朝熊神社の祭神は木花開耶姫であり、その神体は桜樹と古記にみえる。(和訓栞)

注6 葛城氏は応神天皇代の人といわれる葛城襲津彦を初出とする。襲津彦の女磐之媛は仁徳后となって履中、反正、允恭を生み、又襲津彦の子、葦田宿弥の女黒媛は履中の妃となった。とすれば、仁徳、履中の頃に倭朝と葛城氏の連合及び臣従が成立したのではあるまいか。

注7 愛知県碧海郡桜井村下谷、奈良県五条市桜井寺前、同豊浦近く、京都府水無瀬等。又撰津国島ノ上郡に桜井頓宮(統日本紀)。

注8 倭朝の伊勢攻略に関しては「風土記」逸文伊勢国の条に天御中主尊十二世の孫天日別命の伊勢津彦攻略として記されている。しかし日本武尊は伊勢能襲野に倒れており(日本書紀)、下って律令国家成立時の天武朝においてすら「天武二年四月、欲遣侍大来皇女千天照大神宮、而今居泊瀬齋宮。是先潔身稍近神之所也」(統日本紀)とあって、倭朝から差出された齋宮は伊勢国に容易に近ずけず、文武二年十二月に、「遷多氣大神宮于度会郡」(統日本紀)と初めて現在の皇太神宮の地がみえる。とすれば、伊勢に関しては采女〱齋宮〱の交換、平和共存等々、臣従までには可なりの時日を要したと思われる。

注9 土橋寛氏はこの歌を天語歌の第一首目とし、植物の呪力が酒に加わる事を唱ったタマフリの歌としている。(『古代歌謡と儀礼の研究』113、281頁)とすれば伊勢国三重妹の立場はなお明らかであらう。林屋辰三郎氏は、伊勢の天語部のものとはとらず、海部による「纏向の日代の宮」の寿歌とする(『中世

芸能史の研究」66頁)

注10 本田安次著「田楽・風流」による。なお伊勢伊雜宮—6.24、住吉—6.14、香取—4.5、阿蘇—7.28と田植祭りは何れも苗代作りや田植時に行われている。田遊びは霜月或は睦月に行われた。

注11 波々迦は朱桜カキツバタ或はウワミズ桜の事とされ、現在の多種多様の桜の原種といわれる。

注12 古事記上(日本古典文学大系83頁)

注13 古語拾遺(群書類従第二十五輯七頁)

注14 「古代歌謡と儀礼の研究」193頁「中世芸能史の研究」45頁。

注15 鹿に関しては万葉集卷一六の「乞食人の詠」に「為鹿述痛作之也」があり、各地の民俗芸能、神事芸能に鹿踊り、獅子舞はつきものである。

注16 山部赤人作(新古今集春上)

注17 拾芥抄、中、宮城部19に「南殿前庭(中略)桜樹者、本是梅也。桓武天皇遷都之日所被植也。而及承和年中枯失、仍仁明天皇被改植桜樹也」

注18 「公事根源」には疫神の建立を「正暦五年、長保二年天下シツカナラサリシ時、此神社ヲマツラル」とある。

注19 「やすらい祭」に歌われた歌は大嘗会のみ濃国田哥の後半といわれる。

「やすらえ花よ」の解釈には「花よ、くずくして一寸待ってくれ」という折口信夫説(全集第二巻)や、「一の外国語に非ざるか」の柳田国男説(柳田国男集第七巻「踊りの今と昔」)等がある。

注20 「やすらひ花」は、現在今宮へ二組、玄武神社へ四組、西賀茂の川上の在所へ一組、上賀茂へ一組出る。玄武神社の記録によると、花傘にさくれる花は、山桜花、椋棠花、山菜花、楓樹芽以上の五種の何れも生花である(本田安次著「田楽・風流」)

注21 喜田貞吉「福神信仰の変遷」(神道講座九、一〇冊)

注22 信西入道の子成範民部卿。十訓抄、謡曲「鸚鵡小町」にその名がみえる。

注23 早川孝太郎氏の分類による(花祭8頁)。天竜川の支流によって大入系と振草系に分けている。

注24 総社は菊理比咩命を祀る加賀の白山神社。白山神社と精霊の関係について

あだとさくら(下)

は、森貞二郎「穢多と氏神」(民族と歴史 第六巻第四号)に「…十の八、九は白山神社を奉じ居れり」とあり、両者の関係を暗示している。又、花祭の神楽の真床襲袵に当るものを白山と呼ぶ(折口信夫全集一七巻 332頁)

注25 ひじり八日知、聖 \surd も亦体制から疎外された帖外の民であり、山に入って修験を事とした者を特にそう呼んだ。後には「高野聖」にみられるように農業以外のあらゆる賤業にたずさわっている。

注26 酒、栗、榎、蕎麦餅、野老、御幣餅。

注27 折口信夫は、歌舞伎の棧敷は「さずき」に由来し神招ぎの場所で祭りの中心であったが、亦尊貴の神の見物席でもあった、として神招ぎの場所へさずき \surd が棧敷に変わる経路を説いている(全集十八巻)。これに対し、この説には、舞台的意味と観客席の意味の矛盾する二つの意味があるとする林屋氏の批判(日本演劇の環境)があるが、池田弥三郎氏は、折口説を整理して「古代のさずきの神招ぎの場所の意義は歌舞伎の矢倉もしくは櫓に行き、さずきもついていた観覧所の意義は棧敷に伝えられた」としつつも、この点を「芸能史の出発点のもつれによって生ずる問題は未解決」(江戸時代の芸能)としている。

注28 池田弥三郎氏は、花祭の「花の舞」の踊り手の通路の意味とし、さらに「花をかざした相撲人の登場する通路」をその源としている(江戸時代の芸能)。

注29 能楽の舞台の鏡板の松は神の依代といわれているが、能はこれにむかっただけでなく観客正面に演ぜられている。かように、能、歌舞伎等は、花祭における湯蓋のような精霊の神の依代としての鏡板の松、櫓、矢倉を残し乍ら、しかも新来の神々大王、後に將軍 \parallel 見物衆 \surd の側を正位として、それにむかっただけの降伏のタマフリとして演ぜられたのである。なお、戸井田道三氏は黒川能のシユゲ神、王祇様と春日神社の神の三重構造にふれ、春日神社について「うえからの統制との妥協であった」としている。(観阿弥と世阿弥)

注30 世阿弥の「風姿花伝」に「時分の花をまことの花と知る心が、真実の花に猶遠ざかる心なり。」「時分の花、声の花、幽玄の花、かやうの条々は、人の目にも見えなれども、その態の出でくる花なれば、咲く花の如くなれば、又

やがて散る時分なり。たゞまことの花は、咲く道理も散る道理も心のままなるべし」等々。

注31 万葉時代の桜の名所は、天之来芽山、奄田山、春日山、三笠山、糸鹿山、絶等寸笑山、吉野山（古代歌謡と儀礼の研究）

注32 本論考の中心点となっている精霊△はな▽の転化に関しては、近松良之「呪術と芸術」（『美学』75号）参照。

（一九六九年九月四日受理）